

## 学位論文要旨

氏名

安田 元

題目

南アジア旧植民地地域における持続可能な農業生産体制の構築に関する研究  
—インド北部平野部及び丘陵地農村を事例として—  
(Studies on Development of a Sustainable Agricultural Production System in the Old Colony Regions of South Asia: Case Studies of Rural Communities in Plain and Mountain Areas in Northern India)

南アジア旧植民地地域は、社会、経済、文化が多様であることに加え、生産基盤整備の立ち遅れや貧困など、旧植民地支配による負の遺産を引きずっている。本研究では、インド北部の平野部と丘陵地農村を事例として、農村の社会経済の問題とその歴史的展開の過程を明らかにしたうえで、これらの地域における持続可能な農業生産体制の仕組みを構築するための方向と課題について検討した。検討の視点は、再生産が可能な農業生産とかがつそれによって農民の生活が維持できる仕組みの形成においた。

最初に、インド平野部ウッタルプラデシュ州バグバナ村において、カーストと農村経済構造の関係を分析した。ヒンドゥ教地域における社会階層別職業集団であるカーストは、土地の所有や就業など、人々の社会経済活動を階層別に規定していた。かつて、英国政府は、最上位カーストのブラーミンを土地税徴収人として位置づけ、この体制を植民地支配に利用した。分析の結果、次のことが明らかになった。独立後、農村に貨幣経済が浸透したことと、下位カーストを社会・経済的に引き上げる留保政策が実施されたことによって、従来の身分的格差に加えて、同一カースト内でも経済的格差が生じつつある。不耕作地主層であったブラーミンのなかで、農地の分割相続が増え自作農へ転化する者や、最下層であるスードラのなかで、カーストの枠を越えた職業に就く者が現われている。一方、ブラーミンへの依存関係を失ったスードラや結婚の際の持参金の捻出といった慣習経済によって貧窮する世帯も出ている。その中には、耕地の表土を売却する者もあり、農業生産基盤の破壊をもたらしている。こうしたなかで、士族であったクシャトリアは耕作農民として、農地を分割することなく、輪作や緑肥の導入などによって地力を維持し、市場に対応した集約的な農業経営を行っている。

次に、丘陵地帯であるダージリン県トウデ村において、商品作物であるカルダモン栽培の分析を行った。この地域では英国の植民地支配前には、焼畑による自給的な農業生産が存在したが、英国支配によって、森林資源の利用が禁止され、農民は土地使用税が課された永年耕地での作物栽培を強制された。独立後も、小麦やジャガイモなどが政府の配給用作物として連作され、土壌の肥沃度は低下した。分析の結果、次のことが明らかになった。1980年代に、中間商人の介在によりショウガ科のカルダモンが商品作物として国有林内で急速に拡大した。カルダモンの大量生産のために、国有林の上層木が伐採され、収奪的な栽培が行われた。その結果、1990年代後半からカルダモンの収量は激減し、農村経済は急速に衰退した。こうした中で、貧困線以下に暮らす人々が、NGOの支援により伝統的な相互扶助組織を応用して作った協同組織が、植林を行い地域資源の保全に取り組みながら、新たな経済作物を栽培し、自立経済を取り戻す試みがなされている。

こうした歴史過程を経てきた南アジア旧植民地地域において、持続可能な農業生産体制を構築するためには、カーストのような身分制度を解体し、農民の自立化を進めることが重要である。そのうえで、表土のはぎ取りのような農業生産基盤の破壊を防ぎ、地力の回復と維持を図りつつ、市場にも対応しうる営農の担い手を育成することが課題である。一方、トウデ村のように作物のモノカルチャ化によって地力が低下している地域では、新たな経済作物の導入を図り、作物の多様化を進めるとともに、生態系の保全に取り組むことが重要である。同時に、その担い手として、地域に伝統的に存在してきた相互扶助組織を、生産物の販売も担う組織として育成することも必要である。

## 学 位 論 文 要 旨

氏 名

Hajime Albert Yasuda

題 目

Studies on Development of a Sustainable Agricultural Production System in the Old Colony Regions of South Asia: Case Studies of Rural Communities in Plain and Mountain Areas in Northern India  
(南アジア旧植民地地域における持続可能な農業生産体制の構築に関する研究  
—インド北部平野部及び丘陵地農村を事例として—)

South Asia, a diversified area which has long faced socioeconomic problems and inequality since colonization such as lack of agricultural infrastructure and poverty. This study not only discusses what preceded these prolonged socioeconomic problems, while confronting the history of colonization directly, but also explores the possibility of encouraging the people towards a sustainable agricultural development. The study puts emphasis on development system, which involves reproductive farm production systems as well as the livelihood of rural peasants.

First, this study discusses the structural relationship between the caste system and the rural economy in Bagbana village, a typical community in Uttar Pradesh. The caste system, a traditional hierarchical socioeconomic structure, still rigidly regulates the socio-economy such as land holdings and occupations. During the British colonial period, the Brahmins took over as tax collectors, thus keeping the caste system alive. This study reveals that the Indian Reserve System contributed to the emergence of backward people as a strong community dealing with socioeconomic activities that created other economic gaps between the same caste classes i.e. the emergence of farmers with public servant jobs in Sudra, and farmers, who were not traditionally involved in farming directly, in Brahmins. It is witnessed today that along with the permeating of the money economy into the rural economy, the traditional social disparity starts to dissolve into an economic disparity. Deprived farmers are selling their topsoil to brick merchants, causing the farming system to exacerbate. Even under this situation, Kushatriyas (people of the former warrior class) are managing labor-intensive farming, without partitioning their farmland, using organic manures and a rotational system to produce market-oriented crops while maintaining soil fertility.

Second, Thode village, a mountain village in Darjeeling district, has had an appropriate production system, which has led to a self-sufficient economy. Before the British occupation, self-sufficient swidden cultivation systems existed; however, the colonial government prohibited the utilization of forest resources while implementing forced migration to perennial terraced fields, which were taxable. Farmers of Thode village had to sell their farm products such as wheat and potato to pay land tax. This tax policy on farm lands was continued even after independence. However, the continuation of the tax policy even during the periods of famine in these villages has resulted in the failure of re-cultivation. In the 1980s, commercial production of Cardamom, which was brought by middlemen, was widely cultivated in the reserved forest lands as a cash crop. This study revealed that for the cultivation of Cardamom in Thode village, the upper layer of natural vegetation was cut due to large scale of production and herbicides were used, which eventually resulted in the spread of diseases, and ultimately the depletion of forest ecosystem, and with it, the rural economy. Nowadays, traditional mutual support systems or so-called Self Help Groups, set up with the assistance of NGOs, have recruited the extremely poor to practice tree planting to preserve the ecosystem. In addition, these groups are attempting to promote commercial farm products to reestablish the self reliance economy.

To construct a sustainable agricultural production system in this area of south Asia, without confronting the history first, would be meaningless. The caste systems should be dissolved and self-governing farming groups or coops should be empowered to prevent the erosion of the agricultural land. In addition, for communities like Thode, which lost soil fertility to the overuse of herbicides, new market-oriented products should be introduced to preserve the ecosystem and to augment the mutual support systems to be sales organizations of their own commodities in order to survive in the present socioeconomic system.

## 学位論文審査結果の要旨

学位申請者 氏名	安田 元
審査委員	主査 琉球大学 教授 仲地 宗俊
	副査 琉球大学 教授 仲間 勇栄
	副査 鹿児島大学 教授 岩元 泉
	副査 佐賀大学 教授 武田 淳
	副査 鹿児島大学 教授 秋山 邦裕
審査協力者	
題目	南アジア旧植民地地域における持続可能な農業生産体制の構築に関する研究—インド北部平野部及び丘陵地農村を事例として— (Studies on Development of a Sustainable Agricultural Production System in the Old Colony Regions of South Asia: Case Studies of Rural Communities in Plain and Mountain Areas in Northern India).
<p>南アジア旧植民地地域では、社会・経済・文化が多様であることに加えて、生産基盤整備の立ち遅れや貧困など旧植民地支配による負の遺産を引きずっており、農業生産は多くの困難に直面している。本研究は、インド北部平野部及び丘陵地農村を事例として、農村の社会・経済の問題構造とその歴史的展開の過程を明らかにしたうえで、こうした地域における持続可能な農業生産体制の仕組みを構築するための方向と課題を分析した実証的研究である。</p> <p>研究の視点は、再生産が可能な農業生産とかがそれによって農民の生活が維持できる仕組みの形成に置かれている。研究の方法として、社会・経済の条件が異なる二つの地域を選定し調査を行った。その一つは、カースト制度が色濃く残る平野部ウッタルプラデシュ州バグバナ村であり、他の一つは英国の植民地支配のもとで焼畑農耕から定住農耕に移行させられ、さらにその後、商品作物のモノカルチャ化により農業生産が衰退した丘陵地の西ベンガル州トウデ村である。</p> <p>研究の結果、次のことが明らかにされた。カースト制度と農業生産の関係では、独立後、農村に貨幣経済が浸透したことに加え、下位カーストの社会的・経済的地位を引き上げるこ</p>	

とを目的とした「留保政策」により、カーストによる就業の規制が緩くなり始めている。その結果、不耕作地主であったブラーミンの中に農地の分割相続が増え自作農へ転化する者や、最下層であるスードラのなかにカーストの枠を超えた職業に就く者が現われている。一方、下位カーストの中にはブラーミンへの依存関係を失ったことや結婚の際の持参金の捻出といった慣習経済によって貧窮する世帯も出ている。その中には耕地の表土を売却する者もおり、農業生産基盤の破壊をもたらしている。こうしたなかで、士族であったクシャトリアは、耕作農民として農地を分割することなく、輪作や緑肥の導入などにより地力を維持しながら、市場に対応した集約的な農業経営を行っている。

次に、丘陵地における作物のモノカルチュア化の過程とその問題は次のとおりである。この地域では英国の植民地支配前には、焼畑による自給的な農業生産が営まれていたが、英国支配の下で、森林の利用が禁止され、農民は土地使用税が課された永年耕地での作物の栽培を強制された。独立後は小麦やジャガイモが連作され、1980年代に中間商人の介在によりショウガ科のカルダモンが商品作物として栽培され、国有林内で急速に拡大した。この過程で、国有林の上層木が伐採され収奪的な栽培が行われた。その結果、1990年代後半からカルダモンの収量は激減し、農村経済は急速に衰退した。こうした中で、貧困線以下に暮らす人々がNGOの支援により伝統的な相互扶助組織を応用して作った協同組織が植林を行い生態系の保全に取り組みながら、新たな経済作物を栽培し自立経済を取り戻す試みを行っている。

こうした研究を踏まえて、南アジア旧植民地地域において持続可能な農業生産体制を構築する方向として、カーストのような身分制度の解体を進めることを基本に、表土のはぎ取りによる農業生産基盤の破壊を食い止め、地力の回復と維持を図り、市場に対応する営農を行う担い手を育成することを課題としてあげている。また、作物のモノカルチュア化によって経済が衰退している地域では、新たな経済作物の導入とともに生態系の保全に取り組むことの重要性が明らかにされた。同時にその担い手として、地域に伝統的に存在してきた相互扶助組織を生産物の販売も担える組織として育成することも課題としてあげている。

本研究は、克明な実証研究によって、南アジア旧植民地地域における農村社会と農業生産の構造を分析し、その課題と克服の方向を明らかにした点で地域開発における貴重な研究成果である。特に、ヒンズー教地域におけるカースト制度の変容のメカニズムと、その中で自立的な農民が形成されつつあることを明らかにした点は、この地域の社会構造研究の水準を引き上げる成果と言える。また、モノカルチュア依存経済からの脱却の方向を示し、その担い手として伝統的な相互扶助組織に着目し、その再編を指摘した点も研究成果として高く評価できる。本研究は博士（農学）の学位を与えるに十分な価値を有するものと認められた。

最終試験結果の要旨	
学位申請者 氏名	安田 元
審査委員	主査 琉球大学 仲地 宗俊
	副査 琉球大学 仲間 勇栄
	副査 鹿児島大学 岩元 泉
	副査 佐賀大学 武田 淳
	副査 鹿児島大学 秋山 邦裕
審査協力者	
実施年月日	平成 20年 6月 28日
試験方法 (該当のものを○で囲むこと。) <input checked="" type="radio"/> 口答 <input type="radio"/> 筆答	
<p>主査及び副査は、平成20年6月28日の公開審査会において学位申請者に対して、学位申請論文の内容について説明を求め、関連事項について試問を行った。具体的には別紙のような質疑応答がなされ、いずれも満足できる回答を得ることができた。</p> <p>以上の結果から、審査委員会は申請者が博士（農学）の学位を受けるに必要な十分の学力ならびに識見を有すると認めた。</p>	

学位申請者 氏名	安田 元
<p>[質問 1] 24枚目のスライドを見ますと、バグバナ村における土地変化は1次変化、2次変化、3次変化がありますね。その3次変化のなかでの、ブラーミンの長子相続から均分相続への移行はいつ頃ですか。</p> <p>[回答 1] 留保制度が始まった時期に始まったと考えられます。だいたい1980年以後にブラーミンの世帯は一気に農地を個別に分割しました。この変化は、社会・経済の近代化とともに、世帯もしくは家族の単位を集団から個へと変えたことにその意義があると言えます。</p> <p>[質問 2] 一般的スパイスのターメリックがありますね。これはこういうところでは栽培できないんですか。</p> <p>[回答 2] ウコンも作られています。これはほとんど家庭菜園で作られています。あまり取引はされていません。料理の時に必要な分だけ使われるという形です。</p> <p>[質問 3] 視点の問題になると思いますが、この二つの事例について、どうして平坦地と丘陵地を選んだのですか。私はむしろ、共通点よりもインドの多様な地域性を代表するものとして平坦地、丘陵地が位置づけられるのではないかと思います。したがって、二つのタイプの違いを強調した方がよいのではないかと思います。ここで取り上げた二つの地域はそれぞれのタイプの典型例であって、一つはカースト制度であり、もう一つは歴史的な負の遺産をどう克服するかという問題です。そして結論部分でも、平坦地の結論はこうです。丘陵地はこうですと分けた方がよいと思います。</p> <p>あとひとつ、言葉の問題ですが、「潜在的後進地域」という表現がありますが、これは気になります。両方とも平均値より低い、貧困率は高いということであれば、後進地域でいいんじゃないですか。</p> <p>[回答 3] はい。そうですね。分かりました。</p> <p>[質問 4] スライドの19で、耕地の表土2メートルくらいをレンガ製造業者に売り、その後、レンガ職人として働いているということが出ています。これはどういうことですか。耕地の表土の部分はレンガに適しているんですか。山のなかの粘土じゃダメですか。</p> <p>[回答 4] この地域は山がなく平坦地です。皮肉なことですが、土地の利用権を売った本人はレンガを製造する業者に雇われて、自分の土地をレンガに焼いています。</p> <p>[質問 5] 耕地の表土のような貴重な資源を売らざるを得ないほどの経済的貧困はかなり問題があると思います。地域外からレンガの材料を持ち込めば地力の破壊を防げるのではないのでしょうか。</p> <p>[回答 5] インドではほかの州から物資を買う場合は税金がかかります。農産物にしてもお酒にしても、州を越えて売買すると10%から15%の税金がかかります。物資は州を越えて自由に移動できないかたちになっています。</p> <p>[質問 6] スライド31と32に表土の厚さが半分になったと説明しています。森林の減少、農薬の使用、換金作物の導入などを理由としてあげていますが、これはちゃんとした説明になっていません。その間に、何か表土流出の媒介の説明が必要だと思います。</p> <p>[回答 6] この地域は雨期なると雨が多い地域です。インド独立後、森林の面積が減少しました。その結果、地表水が直接耕地の表土を押し流していきることが起こりました。</p> <p>[質問 7] 土壌浸食が進んだというふうに説明した方がいかな。例えば、エロージョンを二つに分けて考えますと、土壌の養分がなくなって流される要因と、二つめは表土流出ですね。こうしたことを説明として入れた方がよいと思います。</p> <p>[回答 7] 分かりました。ありがとうございます。</p>	

- [質問 8] 32 枚目のスライドに、土地分級と土地使用税の徴収が始まったとあります。その結果、強制移住がなされ、家畜の放牧が禁止され、森林の利用が禁止されたとしています。その地域について、その内容をもう少し詳しく示せますか。
- [回答 8] もともと、この地域の人々は移動耕作をしていました。この地域がブータン領からイギリス領に組み入れられた時、イギリスはこの地域から収益をあげる目的でトウデ村を含む地域を国有林として囲い込みました。そして、その一部に居住地をつくり、それとセットで永年耕作地、要するに段々畑をつくりました。戸籍がつくられ、土地の肥沃度や標高で税金が課せられるようになりました。
- [質問 9] 大事な歴史的ポイントとなるどころだと思いますが、本文のなかで、コミュニティーの場所とか、耕作地の位置とか図に示されていなかったように思います。どこかに示してありますか。
- [回答 9] 土地使用税は92ページに述べてあります。1882年の資料なんですけど、カルダモンの畑、水田、休耕地、それぞれにどのように課税されていたかということを示してあります。
- [質問 10] さっきとは違うところですが、均分相続した時の地割表みたいなものがあったでしょう。それと同じような土地分級の図みたいなものは残ってないでしょうか。
- [回答 10] この地域では、インドからの独立運動がありまして、その闘争の過程で古い資料は焼失してしまっているようです。
- [質問 11] 下層カーストの社会的地位を引き上げるための手段としてとられている「留保政策」は英語では何と言っていますか。reservedで「留保」というのはやや違和感を覚えます。その言葉でいいですか。
- [回答 11] 日本で、「留保政策」を対象に研究している押川文子さんという方がおられますが、その人の『社会文化と留保制度』という文献でも「Indian Reservation Act」を「留保政策」としています。
- [質問 12] 議論を聞いていますと、森林生態系の破壊とか、森林生態系という言葉を使っています。あなたは森林生態系ということをごどのようにとらえていますか。
- [回答 12] 森林と人々の利用関係を含めて考えています。森林の範囲とかそこにおける樹種といったことだけでなく、人々が森林をどのように利用しているか。そういった関係を含めて森林生態系と考えています。
- [質問 13] それは森林の利用システムのことではないですか。もし、森林生態系という言葉を使うんだったら、それを何らかの形で立証しなければなりません。ここでは、「森林の利用」に変えた方が良くと思います。
- 地域の人たちが森林を利用することによって、森林は荒れていくわけですね。そのひとつの要因として焼畑をあげています。焼畑でもいろいろな形態があって、例えば、熱帯地域で伝統的に行われていた焼畑は、資源を循環的に利用するsustainableな利用です。自然を破壊するというじゃありません。商業伐採がはじまって収奪型で、循環利用をしない伐採になり、作物もモノカルチャーなものに変わっていきます。これと伝統的なものは分けて考える必要があります。インドの焼畑はどういう焼畑ですか。
- [回答 13] トウデ村に住んでいたレプチャの人たちが行っていた焼畑は独自の再生産の仕組みがあって、そのなかに人々の社会の相互扶助の仕組みも入っていると捉えまして、その他の独立前の焼畑に関しましては、収奪的なものではなく、人々の社会経済の仕組みを支える要素のひとつであった私は捉えています。